

まちの史跡めぐり

203

猿田彦大神と庚申尊天(3)

町文化財専門委員
石瀧 豊美

写真①は須恵川にかかる須恵橋で、右側に車道、左側に歩道があります。橋を渡った左側には専能寺の白い塀が見えます。その塀と「須恵川」と書かれた標識の間、ちょうど標識の左下に見える石碑が猿田彦大神です(写真②)。「太神」と書かれているように見えます。背面には「明治三十三年〃〇月〇日再建」と書かれているようですが、〇の部分の正確に読み取れませんでした(写真③)。明治33年(1900年)は十二支では庚子(か)のえね・コウシ(こ)です。申年で

はなく子年でした。再建と書かれているので、もともと由緒を持つ元の石碑があり、あるいは水害で破損して同じ場所に再建したということなのでしょう。今は頑丈なコンクリートの柵で囲まれています。

先日、福岡市早良区藤崎の猿田彦神社にお参りし、お札を受けてきました。藤崎バス乗継ターミナル(早良市民センター)と向かい合った位置にあります。ひっそりとしていて車で通り過ぎるだけでは気付かないかもしれません

(写真④)。鳥居の両側に「奉納」と書かれた柱が立っていて、その上にほおかむりをした猿の像が置かれています(写真⑤)。

猿田彦神社のホームページに由緒が書かれています。〈猿田彦神社は、天照大御神の命により天孫降臨した二二ギノミコトを道案内した猿田彦大神を祀っています。もともと街道の出入り口に祀られる道祖神として伝えられてきたものですが、猿の字を冠する神様ということから庚申信仰と結びついたとされます。以来、60日ごとの庚申の日に祭りを行い、猿にちなみ災難が去る「幸福が訪れる」という信心を集めてきました。〉

猿は「去る」に通じるので、猿そのものが信仰の対象となったということ。猿田彦のお祭りが庚申の日にされるのですから、確かに猿田彦信仰と庚申信仰とが混ざり合っています。十二支の庚申(かのえさる・コウシン)の日は60日に1回回ってくるので、年間に6回(時に7回)庚申祭が行われます(毎年同

じ日というわけではなく必ずズレが生じます)。猿田彦神社の庚申祭で猿面が授与されているのは有名で、特に初庚申の日の混雑ぶりはテレビなどでも取り上げる風物詩となっています。一年を通じての無病息災を祈念するために、初庚申が大切にされるのでしょ。写真⑥は社務所の入り口に掲げられていたもの。須恵町でも猿面を玄関先に掲げている家を見かけることがあります。

写真⑦は福岡市西区周船寺の伊親神社にある三つ並んだ「庚申塔」です。糸島郡は元々は怡土郡と志摩郡に分かれていて、その怡土と同じ名を冠した神社です。右端は、おそらく太陽を象徴する円の中に「庚申神」と書かれ、真ん中は「庚申塔」と書かれていて、左端は文字が読み取れません。これらも元は路傍に置かれていたのが何らかの理由で境内に集められたものか、と想像しますが、正確にはわかりません。

伊親神社には社殿の右側に「庚申」と大きく書かれた板碑

もありました(写真⑧)。ちょうどお祭りの準備をしていたところで、お世話をされている人に聞くと、「こっじんさま」と呼んでいるということでした。

道を歩いていると、猿田彦大神、庚申尊天と書かれた石碑をよく見かけます。あまりにも頻繁に見かけるので、むしろ気にしないで通り過ぎるようなものです。この3回の連載では須恵町にある猿田彦大神(または太神)を、合わせて5基紹介しました。これに対して伊親神社では庚申、庚申、庚申塔でした。

たまたま知人の中村修身さんから宗像市の石碑などを調査した資料集をいただきまして(沖ノ島研究「別冊」)。それを見ると、宗像市では庚申塔(庚申尊天など)が圧倒的に多く、猿田彦は少ないような印象を受けます。猿田彦と庚申とで、地域によって信仰のあり方に偏りがあるのか、とも思いますが、これも正確にはわかりません。今後さらに考えてみたいことです。

